2023年（R5年）
2月
No. 369

ひとはつうしん

（字：水田淳也）

（ホームページアドレス）http://hitoha-fukushi.com （メールアドレス）honbu@hitoha-fukushi.com

社会福祉法人 ひとは福祉会
〒739-1203
広島県安芸高田市向原町長田1857番地
TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

● 特別寄稿 ●

「おーい文尚さん、聴こえますか。」

訃報を聞いた私は思わず「まだだよ、寺尾さん、まだまだ話がいっぱいあるのに」とつぶやきました。父親や妻が亡くなったとき以上の深い喪失感に襲われています。親友であり畏友でした。

寺尾さんの生き方は「障がいのある人と共に生きる文化」を創造したところにあると思います。『自生ということ』や『おーい聴こえますか』などに紡がれた言葉にというよりも、ひとはの姿そのものに彼の生き方、大切にしてきたものが息づいています。

彼は「親鸞さんに出遇ったから、いつ死んでもいいんじゃ。おそろしゅうない」と常々言っていました。「親鸞聖人」ではなく「親鸞さん」でした。人間は誰でも平等で、差別されることがあってはならない。その点では、徹底してぶれることはありませんでした。差別と虐待を強く憎んでいました。

世間一般では「ともに生きる」という理念を掲げて、施設運営をしているところが多数あります。しかし、本当に平等だと言行一致している経営者や職員はほとんどいません。できるものはできて当たり前、できないものは仕方ないと割り切って、暗黙のうちに「自分と障害がある人たちは別だ」と思っています。私も、ほとんどそうです。はっとしたときのみ平等になれるだけです。寺尾さんはいつでも心の底から平等だと思っていました。それが、長い間話を交わすことでわかってきたのです。心から「平等」を実践する人だったと、そう思えてなりません。

笑顔と太い声が今でも見えて聞こえます。まだ合掌ができません。

（東広島市 わかば療育園 岩崎 學）

続・文尚さんへ届けたい

旦那の一周忌法要に、文尚さんも参列してくださった。

その後、お会いした時「あんたの妹夫婦があんたのことを静かに見守ってくれとるのう。」と声をかけられた。決して仲の悪い姉妹ではないが、競争心や劣等感みたいな複雑な思いを妹に対して一方的に抱いていた私。妹夫婦の愛情を受け取ることを気付かせてくれた文尚さん、感謝です。

（スタッフ 蔵下美穂）

文尚さんへ

ひとはつうしんで病気でも散歩を頑張っていることを知りました。趣味の話などをしてみたかったです。

（きらら 大越 史朗）

「なるほど！」「なるほど！」

「ありがとう。」「ありがとう。」

一日に何回も言われていた光景を思い出します。

（スタッフ 築城 暁子）

知人から突然の訃報を受け、驚きました。

その知人が勤める「障害者活動センターあゆみ」は、1988年に小規模作業所からスタートし、文尚さんに作業所設立の手続きについて教わったり、ひとはの製品をあゆみで販売し運営資金にしたりと、文尚さんへの感謝の言葉を聞きました。

ひとはだけではなく、広く福祉関係者からも慕われていたことを改めて知りました。

（スタッフ 中村 誠）

ひとはの日々

「しろいのりもできるよ」

季節のイベントを楽しむため、お面を作っていた時のこと。糊が手に付く感触が苦手で、白い糊(チューブ)から青い糊(スティック)に替えてもらう子がいました。その様子を見ていたそうじゅくんも替えてほしいと言うかなと思っていたら、「ぼくはそのあおいのりでもできるけど、このしろいのりでもできるよ」と貼る作業を続けました。その気持ちはぶれることなく、最後まで作品を完成させたそうじゅくん。彼がまた一段、発達の階段を上ったと思わせる出来事でした。

(ぴあ・くらぶ　川本 三八子)

「しっかりするのをやめた」

物忘れの多い私はうっかりが多い。ある時からしっかりするのをやめた。きららの仲間に「今日は〇〇があるから覚えておいてね」と頼むことにした。すると必ず教えてくれる。

「今日は給料日よ」「忘れんでね」誰ともなく声掛けが。きららの誰もが自分たちがしっかりしないと押川さんは…と思っている。ひとは館のみんなに私は支えられている。ありがたい。

(ひとは工房　押川 真理)

「親元を離れて思うこと」

40歳にして1人暮らしを始めました。状況は違えど、親元を離れて生活するという点では共同ホームのきららとさして変わりありません。常々思うのは、生活が大変だということ。今までは何となく両親のありがたみを感じてはいましたが、ここにきて改めて偉大さを感じることができました。

現在、きららの高齢化が言われています。併せて親も年齢を重ねます。可能であれば家族と過ごす時間を有意義に過ごしてもらいたい。そしていつか来る別れの日にはちゃんと「ありがとう」と言えるように、が私の一つの役目だと思います。もちろん私自身も同様です。

(共同ホーム ひとは　村本 悠樹)

・・・特別寄稿・・・

「内省と共感の人」
～寺尾文尚との再会

40年来の友人の一人であった私だが、この度、改めて彼の人となりに触れる機会を得た。彼は福祉活動家の先達で、多くの人をその生き方で感化し、福利をもたらせた人であるが、その内実は内省の人でもあった。彼は、親鸞さんと障害のある人との出会いが自分を変えたと言うが、彼自身の弱さの自覚に、それは深い共感となった。人は、自身の弱さや劣りを自覚すると、虚勢か卑屈の曲道へと進むが、その道に進まない者だけが、粘り強い中道を歩む。彼はそういう人だった。

(ひとはのある地域で共に活動した友人　金岡 俊信)

「寺尾文尚さんの本棚」

「転んでもただでは起きん」

蔵書をながめながら思い起こす寺尾さんの言葉です。失敗や間違いを糧とし、より良くなっていくためにはどうしたらいいか。本を読むことで先人の知恵を借り今を生きる人と対話をする中で考え、実践していく。「福祉はロマン」とも。

わからないことをとことん追求するその姿勢が寺尾さんの本棚に現れています。

(元スタッフ　井口 郁恵)

井口さんは、文尚さんの蔵書を何冊か借りにきて、しばらく文尚さんと話して帰ってました。

(寺尾 順子)

編集後記

もう ずいぶん前のことだが、ある研修で文尚さんと同じ講義を受けることがあった。横川の会場で、他にもひとはの職員が数名参加していた。昼休憩の時間になり、「近くに美味い店がある」と文尚さんから声をかけられ、ひとはのメンバーでランチに行くことになった。昔ながらの喫茶店で、エビフライかコロッケのセットを食べた覚えがある。ひとは以外の場所でテーブルを囲んでいる状況がなんだか新鮮で、喫茶店のレトロな雰囲気と共に思い出すことがある。(白井 くみこ)